

Pāṇini-Sūtra 3.1.123 に挙げられる ヴェーダ語の gerundive 語形について

尾 園 絢 一

1. Pāṇini は 3.1.95-132 において *kṛtya-* (gerundive をつくる suffix: *tavya*, *tavyaT*, *aniyaR*, *yaT*, *KyaP*, *ṆyaT*) について規定しており, 3.1.123 にはヴェーダ語の形として 17 個の *-ya*-gerundive 形が列挙されている. 同所に挙げられる語形の中には比較的新しい時代の文献に見られるものや, 同定できないものもあり, 検証が必要である. 既に P. THIEME がこれについて考察している¹⁾が, 再検討の余地がある.

3.1.123 *chandasi niṣṭarkya-devahūya-praṇiyonniyocchiṣya-marya-staryaādhvarya-khanya-khānya-devayajyāpṛcchya-pratiṣṭvya-brahmavādyā-bhāvya-stāvyaopacāyapṛdāni*
 ヴェーダ語では, ① *niṣṭarkya-*, ② *devahūya-*, ③ *praṇīya-*, ④ *unniya-*, ⑤ *ucchiṣya-*, ⑥ *marya-*, ⑦ *starya-(starya-)*, ⑧ *(a)dhvarya-*, ⑨ *khanya-*, ⑩ *khānya-*, ⑪ *devayajyā-*, ⑫ *āpṛcchya-*, ⑬ *pratiṣṭvya-*, ⑭ *brahmavādyā-*, ⑮ *bhāvya-*, ⑯ *stāvya-*, ⑰ *upacāyapṛdā-* という [例外的な語形] がある.

2. *chandas-* n. 「雅語, ヴェーダ語」 (< $\sqrt{\text{chand/}}chad$ 「心地よく現れ出る」) という用語には「サンヒター (ヤジュルヴェーダ散文も含まれる²⁾)」を意味する場合と *bhāṣā-* 「標準語」の対立概念として, 古い時代の言語を広く意味する³⁾ 場合とが見られる. 3.1.123 では, 後者の意味で使用されている可能性が考えられ, Sūtra 文献にのみ見られる語形があることが注目される. THIEME は, Sūtra 文献は *chandasi* の中には含まれないとし, 従って 3.1.123 に列挙される語形は全て, RV, SV, 黒 YS (散逸黒 YS も含まれる) などのサンヒターから引用されたと考えている.

④ *unniya-* (*KyaP*) 「上に向かって」

pratīpaṃ sravanit̥bhya unniyaṃ sthāvarābhyah 「流れている [水たち] には流れに逆らって, 動かない [水たち] には上へ向かって [渡水時の呪文を唱える]」 ŚāṅkhGS IV 14,4

⑨ *khānya-* (*yaT*), ⑩ *khānya-* (*ṆyaT*) 「掘られるべき」

khānyābhyah svāhā 「掘られるべきものたちに, *svāhā*」 TS VII 4,13,1^m

khanitreṇa jīvātīti yat tatra khānyam syāt tena jīvet 「掘る道具によって生きる」と [PB XVI 6,5 にある]. そこに掘られるべき [食物] があれば, それによって (それを糧として)

(110) Pāṇini-Sūtra 3.1.123 に挙げられるヴェーダ語の gerundive 語形について (尾 園)

生きることができる。」 LāṭyŚS VIII 2,4-DrāhyŚS XXII 2,5

khānyābhāve dhānyapātrān nikhāya tair utkhānam jivet 「掘られるべきものが無い場合には、穀粒 [を入れた] 容器 (容器いっぱい穀粒) を [地中に] 埋めてから、掘り出して、それらを糧として生きるべし。」 LāṭyŚS VIII 2,5-DrāhyŚS XXII 2,6

・その他の *-ya-gerundive*: *kheya-* (*KyaP*) ← 3.1.111 *ī ca khaṇaḥ* [*kyap* 106] 「*√khan* の後に *KyaP* がつき、そして *ī* が [*n* に] 代置する」 e.g. *tasmād bāhumātrāḥ kheyāḥ prānānām anuvittyai* 「それ故、[Vedi は] 腕の深さまで掘られるべきである、生体諸器官を発見するために。」 KS XXV 9^p:116,3 = KpS XL 2

さらに 7.2.33 において *chandasi* の下に挙げられる過去分詞 *hvarita-* は MānŚS^m だけに見出される⁴⁾ が、他方において 7.2.69 に挙げられる完了分詞 *sasanivāmsam* は MānŚS, VārŚS のマントラにしか見られない特殊語形であるにも関わらず、*chandasi* に分類されていない⁵⁾。K. HOFFMANN は ŚS の中でも祭式特有の語法は「聖典の言語」として *chandasi* に分類されたとし、J. BRONKHORST もほぼ同様の立場をとる⁶⁾。3.1.123 において、特に⑩ *khānya-* を LāṭyŚS-DrāhyŚS からの引用と見るならば、当然 *chandasi-* はヴェーダ祭式特有の語法を広く意味したものとなるが、THIEME の言うように散逸黒 YS から引用された可能性も否定できない。

3. 以下の語は Pāṇini のアクセント法から見て、不規則なものとなっており、そのために挙げられた可能性が高い。このことは Pāṇini がヴェーダ語のアクセントを正確に知っていたことを示している。これに対し、Pat. II 87 ad 3.1.123 では、アクセントについて言及されている箇所が見られず、Patañjali 等の文法学者たちがヴェーダ語のアクセント、及び Pāṇini 文法のアクセント法について、どこまで正確な知識を有していたかは分からない⁷⁾。

⑤ *ucchiṣya-* (*KyaP*) 「残されるべき」

*ānakṣasaṅgam sthānūr insiṣyāḥ*⁸⁾ 「車軸がひっかからないように、切り株が残されるべきである。」 MS III 9,2^p:115,1

3.1.124⁹⁾ に従って、*śeṣyā-* となることの例外として挙げられたか、或いは *√śiṣ* に *KyaP* がつくと *śiṣya-* となるので、**ucchiṣya-* となるはずであるが、*ucchiṣyā-* という不規則なアクセントを持っているので挙げられた可能性も十分ある¹⁰⁾。

⑭ *brahmavādya-* (*NyaT*) 「brahman に関する議論、謎かけ問答」(本来は *-ya-* による実体詞, Cf. AiG II-2, 828)

ṅmédhaś ca pārucepaś ca brahmavādyam avadeitām 「*ṅmédha* と *Parucepa* は *brahmavādya* を論じた。」 TS II 5,8,3^p

Pāṇini-Sūtra 3.1.123 に挙げられるヴェーダ語の gerundive 語形について (尾 園) (111)

その他, *brahmavādyā-* (アクセントなし) が JUB III 8,1, ĀpŚS XXI 10,12, VadhŚS IV 64 に見出される。

・その他の *-ya-* による実体詞: *brahmavādyā-* (*yaT*) ← 3.1.106 *vadaḥ supi kyap ca [anupasarge 100, yat 97]* 「前接辞がなく, 格語尾で終わる語が補足語 (*upapada-*)¹¹⁾ の時, \sqrt{vad} の後には *yaT* の他に *KyaP* もつく」

e.g. *samāptam brahmavādyam* 「brahmavadya が完了した」 KB XXVII 4, *sadasi brahmavādyam* 「Sadas の中で brahmavadya が [催される]」 ŚāṅkhŚS XVI 13,16

brahmōdyā- (*KyaP*) ← 3.1.106 (これが一般形, *-ya-* による実体詞)

AB, PB, JB, TB, ŚB, ŚBK, BĀU, ĀśŚS, DrāhyŚS, LātyŚS, BaudhŚS, VārŚS, HirŚS, ĀpŚS, KātyŚS, KauśS, etc.

3.1.106 によって導き出される *brahmavādyā-* 及び *brahmōdyā-* の例外形として挙げられた可能性がある。或いは, *ṆyaT* がつくと, アクセントは 6.1.185¹²⁾ に従って, **brahmavādyā-* が求められるが, TS II 5,8,3^p に *brahmavādyā-* が見出され, アクセントが不規則なために, この箇所から引用された可能性も十分ある。

⑤ *bhāvya-* (*ṆyaT*) 「未来の」 ← 3.1.125 *or āvaśyake [ṇyat 124]* 「必然性の意味で, *u(ū)* で終わる語根の後には *ṆyaT* がつく。」

^{1 2} ^{3 2a} ³ ² ^{3 2a} ³ ^{1 2}
puruṣa evedaṃ sarvaṃ yad bhūtam yac ca bhāvyaṃ SV I 619-JS II 3,8 ~ RV X 90,2 **bhāvyaṃ*, VS XXXI 2, AV XIX 6,4 **bhāvyaṃ*

tvāyidam sārvaṃ jāyatām yad bhūtām yad vā bhāvyaṃ 「生じたもの, 或いは生ずべきもの, この全てが君の中に生まれよ。」 AVŚ XIII 1,54, ~ *tat idam sarvaṃ jāyatām yad bhūtam yac ca bhāvyaṃ* AVP-Or. XVIII 20,3, **bhavyam* AVP-Kashm. (アクセントは伝承されていない)

bhāvya- のヴェーダ文献の実例は非常に少ないが, 古典期においては広く見られる。 $\sqrt{bhū}$ の gerundive 形は 3.1.125, 及び 6.1.185 に従って, *bhāvya-* となるが, Pāṇini が敢えて “*bhāvya-*” をヴェーダ語として挙げているのは, **bhāvya-* 又は **bhāvya-* を想定した可能性が考えられる。このような形はヴェーダ文献には見出されない。THIEME は *bhāvya-* SV I 619 を *bhāvya-* と解し Pāṇini がこの箇所から引用したとするが, Pāṇini がどのように SV のアクセントを解していたかは不明である。或いは, *bhāvya-* m. (王の名) が RV I 126,1 に見られ¹³⁾, Pāṇini がこれを gerundive に由来するものと考えた可能性もある。

4. 白ヤジュルヴェーダ (Śatapatha-Brāhmaṇa) に見られる語形

② *devahūya-* 「神々を呼ぶこと」 及び *pitṛhūya-* 「父祖たちを呼ぶこと」 (どちらも本来は *-ya-* による行為名詞)

spārdhante vā u devahūye ātra yeṣu dhvajēsu didyāvah pātanti 「この場合, また, 神々を呼ぶこ

(112) Pāṇini-Sūtra 3.1.123 に挙げられるヴェーダ語の gerundive 語形について (尾 園)

とに関して [人々は] 競い合っているのだ、矢たちが旗の間を飛び交う場合には] RV VII 85,2

tē vā eā ṛtavah / devāḥ pitārah. sā yō haivām vidvān devāḥ pitara iti hvāyaty ā hāsya devā devahūya-
am gācchanty ā pitārah pitṛhūyam. āvanti hainaṃ devā devahūyē 'vanti pitārah pitṛhūye yā evām
vidvān devāḥ pitara iti hvāyati 「それら神々、父祖たちは季節たちなのだ。このように知っ
て“神々よ、父祖たちよ”と呼ぶと、つまり、その者の神々への呼びかけに向かって神々
は来る。父祖たちは父祖たちへの呼びかけに向かって [来る]。神々は神への呼びかけに
際して当の者を助け、父祖たちは父祖への呼びかけに際して助ける、このように知って
“神々よ、父祖たちよ”と呼ぶ場合には] ŚB II 1,3,2 ~ ŚBK I, 1,3,1

ヴェーダ文献に見出される *hūya*-(*KyaP*) は *devahūya*- RV, ŚB, *pitṛhūya*- ŚB のみで
ある。THIEME は、Pāṇini が ŚB II 1,3,2 ~ ŚBK I,1,3,1 を知っていたならば、*pitṛh-*
ūya- も挙げたであろうから、Pāṇini が白ヤジュールヴェーダを知らなかったことの
根拠の一つとして挙げる。

⑦ *stārya*-(*yaT*) 「打ち倒されるべき」

tā idam amṛtam antār ātmān ādhāyāmṛtā bhūtvāstaryā bhūtvā stāryānt sapātānān mṛtyān abhiv-
haviṣyāmah 「この不死のものを Ātman の中に置き、不死の者たちとなり、打ち倒されるこ
とのない者たちとなり、打ち倒されるべき競争相手の死すべき者たちを我々は圧倒する
だろう。」 ŚB II 2,2,10 ~ ŚBK I 2,2,7

・その他の *-ya*-gerundive: *stṛtya*-(*KyaP*) AB II 1,3; 35; III 7,3; VI 1,2, ŚB XIII 5,1,17, GB II 3,3,
e.g. *yō 'syā stṛtyas tān stārtave* 「彼によって打ち倒されるべき者、その者を打ち倒すために」
ŚB XIII 5,1,17

stārya- は唯一 ŚB に見られる。伝統説は 3.1.123 ...*staryādhvaryā*... を *staryā*- + *dh-*
varya- と解しているが、*dhvaryā*- という形はヴェーダ文献に発見できず、*adhvar-*
yā- が KS^m-KpS-MānŚS にある。*adhvaryō 'yām yajno astu devāḥ* 「神々よ、この祭式
は傷つけられないものであれ」 KS XXXV 7^m: 6,3-KpS LXVII 9-MānŚS II 3,8,4, *adh-*
varō TS III 1,9,3, ĀpŚS XII 20,20; XIV 27,7. Pāṇini は当然このマントラを知っていた
と考えられるので、*staryā*- と *adhvaryā*- と解釈すべきであり¹⁴⁾、*adhvaryā*- を
√dhvṛ の gerundive *dhvaryā*- に否定辞 *a-* がついた形と考えていた可能性が高い。そ
の際、アクセントは 6.2.160¹⁵⁾ に一致するので例外ではない。従って、この語形自
体を 3.1.124 の例外として、或いはヴェーダ文献特有の語と認識していた可能性
がある。THIEME は、Pāṇini は白ヤジュールヴェーダを知らなかったという彼の仮説
に基づいて *astaryā*- MS I 5,10:78,11 から *staryā*- が抽出されたとする。*eṣā vā agnir*
astaryā priyā tanūr varūthyā 「これは Agni の、打ち倒されることのない、好ましい、

Pāṇini-Sūtra 3.1.123 に挙げられるヴェーダ語の gerundive 語形について (尾 園) (113)

庇護に与る身体なのだ」MS I 5,10:8,11. 彼によると *astaryā-* は 6.2.160 に従って, *astaryā-* となるはずが, *astaryā-* MS I 5,10:78,11 となっているので, Pāṇini が挙げたとする. しかし, 6.2.160 の例外ならば, 飽くまでも *astaryā-* という形をそのまま挙げたはずであるが, *star°* と挙げているので, *astaryā-* から *staryā-* が抽出されたとは考えがたく, *staryā-* ŚB II 2,2,10 ~ ŚBK I 2,2,7 の方がより適切な実例といえる. 従って, Pāṇini が白 YV を知らなかったという THIEME の説については, さらに幅広い観点から検討する必要がある.

-
- 1) Pāṇini and the Veda, 1935, p.17-24 2) Pāṇini が 3.1.42 において, *chandasi* の下に列挙する periphrastic aorist 語形は, 黒 YS の散文にしか現れないことから明らかである. このことは *brāhmaṇe* (2.3.60) がヴェーダ散文全般を指すのか, あるいはブラーフマナの名を冠する文献を指すのかという問題と密接に関わっている. マントラ部分に対する散文部分として普通理解され, Kāśikā も同様の理解を示すが, ブラーフマナ文献のみを指す可能性もある. 3) Cf. LIEBICH Pāṇini, p.26f. 4) THIEME は, *mā nah soma hvarito vihvaras tvam* MānŚS II 5,4,24^m(cf. KNAVER Mānśś III-V, p.VII) が MS と近い関係にある散逸黒 YS から借用されたものであり, Pāṇini も同じ散逸黒 YS から *hvarita-* を引用したと推測するのに対し (前掲 p.65), HOFFMANN は ŚS のマントラから Pāṇini が引用したものと考え, ŚS の中でも祭式特有の語法は *chandasi* に分類されたと推測する. StII 5/6, p.98 = Aufsätze zur Indoiranistik (Aufs.) III 760 5) HOFFMANN は, Pāṇini がこのマントラを彼が習った文献からではなく, 実際の祭式の実行過程から知っていた可能性を指摘する. MSS 32, p.75f. = Aufs.II 544f. 6) “Pāṇini and the Veda reconsidered” Pāṇinian Studies, Professor S.D.Joshi Felicitation Volumes. p.82 7) THIEME は, Pāṇini 文法のアクセント法は Patañjali よりも前の時代に既に失われていたと考える. 前掲 p.121f. 8) MS では, *s* の前の *t* は通常 *n* になる. SCHROEDER Maitrāyaṇī Saṁhitā, Intr.p.29, MS の Sandhi については LUBOTSKY IJ 25, p.167-179 参照. 9) 3.1.124 *ṅhalor nyat* [*ṅ* で終わる語根, 子音で終わる語根の後には *NyaT* がつく] 10) GOTŌ “Ai. *utsaṅgā-* und Verwandtes” MSS 39, p.34, n.40 11) 3.1.92 *tatropapadam saptamīstham* [この課で, locative としてあるものは *upapada-* である.] 12) 6.1.185 *tī svaritam* [*t* という *it* (= *anubandha-*) を持つものは *svarita* である.] 13) Cf. MACDONELL-KEITH Vedic Index of Names and Subjects II 103 14) GOTŌ Die “I. Präsensklasse” im Vedischen, p.191, n.351 15) 6.2.160 *ḥṛtyokeṣṇuc cārṇvādayas ca* [*nanah* 155, *antah* 143] [*nañ* の後の *ḥṛtya-* suffix, *-uka-*, *-iṣṇuC-*, *cārū-* などの語の後でも, 後分の最後の音節が Udātta である.]

〈キーワード〉 Pāṇini, gerundive, *ḥṛtya-*, *chandasi-*, ヴェーダ語

(東北大学大学院博士課程後期)

178. The 173 Aspects of Omniscience in the *Abhisamayālamkāra*

Fujio TANIGUCHI

The *Abhisamayālamkāra* lists the 173 aspects in its fourth chapter. “Aspects” or *ākāras* are the key concept of the text, and are the objects to be realized in the process of *abhisamaya* or intuition according to Haribhadra’s commentary. Some Tibetan teachers introduce to their commentary the terms *don rnam* and *shes rnam*, and define the 173 aspects as the *shes rnam* (subjective aspects) of the 3 kinds of Omniscience.

179. The Vedic gerundive-forms enumerated in Pāṇini-Sūtra 3.1.123

Jun’ichi OZONO

Pāṇini-ṣūtra 3.1.95-132 prescribes *kṛtya*-suffixes: *tavya*, *tavyaT*, *anīyaR*, *yaT*, *KyaP*, *NyaT*. In 3.1.123, Pāṇini enumerates 17 gerundives, which are taught as Vedic forms (*chandās-*). This sūtra is especially important to consider the question: what Vedic texts did he exploit? It has been researched by P. Thieme, and yet there is room to reconsider his conclusion.

The term *chandās-* seems to be used in two senses. One is ‘Saṁhitā’, the other ‘archaic language’ as opposed to *bhāṣā-* ‘common speech’. It is noteworthy that some gerundives enumerated in 3.1.123 are found only in Brāhmaṇa and Sūtra literature. e.g. *stārya-* ‘to be laid low’ ŚB, *unnīyam* ‘upwards’ ŚāṅkhGS, and *khānya-* ‘to be dug’ LāṭyŚS-DrāhyŚS. If the assumption that Pāṇini quoted *khānya-* from LāṭyŚS-DrāhyŚS is correct, it follows that *chandās-* also covers Vedic usages which sometimes appear in Sūtra literature.

“...*staryādhvaryā...*” in 3.1.123 should be interpreted as *starya-* + *adhvaryā-*, and *stārya-* occurs only in ŚB. According to Thieme, *staryā-* was abstracted from *astaryā-* MS I 5,10:78,11 on account of its irregular accent (cf. 6.2.160). But *stārya-* must have been taught by Pāṇini as a Vedic word as such, or an exception to 3.1.124: **stārya-*. Therefore, the question whether Pāṇini knew the White Yajurveda needs to be further discussed.